

異度として、具体的な目標を示すことは難しい。注意報の意味からみて、感度は70%以上（最低60%）、特異度は98%以上（最低95%）くらいが適格条件の目安のように感じる。陽性的中率は、注意報を受け取った側がその後の対策を講ずるかどうかを、感度と特異度よりもより直接的に表現するものである。ただし、流行現象（警報発生）の頻度が高くないことから（1%あるいはそれ以下）、それほど高い陽性的中率を期待することはできない。陽性的中率の適格条件の目安は30%以上（最低20%）のように感ずる。

2) 注意報発生のための基準値

注意報発生の基準値をいくつか与えて、その基準値に基づく注意報発生の感度、特異度と陽性的中率を算定した。対象疾患は小児科・内科定点と眼科定点の全対象疾患19である。基礎資料は、前節と同様で、1993～1997年の5年間における保健所の1週間の定点あたり報告数である。小児科・内科定点では延べ約17万週、眼科定点では延べ7万週である。警報の基準値は前節で定めた値を採用した。注意報の基準値の候補としては、注意報がある程度の流行が発生しつつあることも意味することを考慮して、流行発生の終息基準値とその前後の値を選んだ。

表V-3-1～3に、小児科・内科定点と眼科定点の対象疾患における注意報の基準値と感度・特異度・陽性反応的中率などを示す。麻疹様疾患では、注意報の感度は、基準値0.3では72%、0.5では67%、1.0では44%であった。前述の感度の適格条件の目安（70%以上、最低60%）からみると、基準値0.3が望ましく、0.5で最低条件を満たし、1.0では満たしていない。特異度は基準値0.3では93%、0.5では96%、1.0では99%であり、前述の特異度の適格条件の目安（98%以上、最低95%）からみると、基準値0.3は最低条件を満たさず、0.5が最低条件を満たし、1.0が望ましい。陽性的中率は基準値0.3では15%、0.5では20%、1.0では29%であり、前述の陽性的中率の適格条件の目安（30%以上、最低20%）からみると、基準値0.3は最低条件を満たさず、0.5と1.0で最低条件を満たしている。感度、特異度、陽性的中率を総合すると、基準値は0.5が選択され、その場合に最低条件を満たしている。頻度（流行発生注意報の発生される頻度）は基準値0.5では5.3%であり、注意報が保健所あたり5年間で12回程度（52週から流行期を除いた週×5年間×5.3%）出されることに相当する。流行の早期把握時点としては、正しく注意報が出されたケースの中で、流行発生開始の4週前が36%、3週前が24%、2週前が24%、1週前が16%であった。

すべての疾患について、同様に、感度、特異度と陽性的中率とそれらの適格条件の目安を比較した結果を、表V-3-4に示す。小児科・内科定点と眼科定点の対象疾患19の中で、注意報発生が適切と判定（感度、特異度、陽性的中率の過半数が適格条件を満たし、残りも最低条件を満たす）された疾患は、手足口病、ヘルパンギーナとインフルエンザ様疾患の3疾患であった。注意報発生がある程度適切と判定（感度、特異度、陽性的中率のすべてが最低条件を満たす）された疾患は、風しん、流行性耳下腺炎、感染性胃腸炎の3疾患であった。注意報発生が可能と判定（感度、特異度、陽性的中率の中で、2つが最低条件を満たし、1つは最低条件をほぼ満たす）された疾患は、麻疹様疾患、水痘、溶連菌感染症、乳児嘔吐下痢症、伝染性紅斑の5疾患であった。残りの8疾患は注意報発生に

は適さないと判定された。

注意報発生が適切、ほぼ適切あるいは可能と判定された 11 疾患について、流行の早期把握時点をみると、比較的早い疾患（流行発生の 3 週前で 60 %以上）は風しんと流行性耳下腺炎であった。逆に、比較的遅い疾患（流行発生の 3 週前で 40 %未満）は感染性胃腸炎とインフルエンザ様疾患であった。残りの 9 疾患は、流行の早期把握時点は流行発生の 3 週前で 40 ～ 59 %であった。

以上、小児科・内科定点と眼科定点の対象疾患 19 の中で、11 疾患が注意報発生の候補となると考えられた。

表 V-3-1. 流行発生注意報のための基準値と早期把握精度—小児科・内科定点、その1—

	基準値	陽性				流行の早期把握時点の割合			
		感度	特異度	的中率	頻度	4週前	3週前	2週前	1週前
麻疹様疾患	0.3	71.6%	92.8%	15.3%	8.2%	35.9%	23.5	24.3	16.2
[1.5, 0.5]	0.5	66.6	95.6	19.7	5.3	32.0	22.2	27.0	18.9
	1.0	43.6	98.7	28.6	1.8	19.6	19.8	32.3	28.3
風しん	0.5	86.6	89.7	13.1	11.6	57.6	20.6	14.1	7.8
[3.0, 1.0]	1.0	80.8	95.7	22.4	5.4	43.6	25.0	21.1	10.3
	1.5	61.9	98.6	34.6	2.1	28.8	29.1	25.5	16.6
水痘	3.0	87.8	88.9	12.7	12.3	46.5	25.3	21.6	6.6
[7.0, 4.0]	4.0	71.5	95.6	19.1	5.3	29.5	28.5	30.7	11.4
	5.0	51.7	98.4	26.3	2.2	19.3	26.2	37.1	17.4
流行性耳下腺炎	1.0	97.0	74.2	6.2	27.0	71.5	24.5	4.5	2.1
[5.0, 2.0]	2.0	86.2	92.7	13.9	8.3	41.9	38.3	12.8	7.0
	3.0	66.6	97.9	24.0	2.7	23.2	39.0	22.0	15.8
百日せき様疾患	0.1	22.6	93.8	3.6	6.2	27.5	25.0	22.5	25.0
[1.0, 0.1]	0.2	22.2	95.3	4.5	4.8	26.7	25.0	22.1	26.3
	0.3	20.3	97.4	6.9	2.8	24.7	25.6	22.8	26.9
溶連菌感染症	1.0	92.0	82.4	8.6	18.8	58.6	21.5	11.3	8.5
[4.0, 2.0]	2.0	68.5	96.1	18.0	4.7	31.3	26.3	20.1	22.4
	3.0	34.8	99.2	27.4	1.1	17.4	22.9	23.2	36.5
異型肺炎	0.5	53.2	91.3	7.6	9.2	33.9	25.9	19.7	20.4
[2.0, 0.5]	0.7	42.2	96.2	11.2	4.2	26.0	22.1	23.5	28.4
	0.9	39.7	97.3	13.4	3.1	25.0	21.0	24.3	30.0
感染性胃腸炎	5.0	93.7	83.2	13.1	18.6	49.8	19.3	16.7	14.2
[15.0, 10.0]	10.0	62.4	97.8	31.4	3.1	16.3	16.5	25.6	41.6
	12.0	40.5	99.2	39.0	2.9	11.5	13.6	25.6	49.2

基準値：流行発生注意報の発生のために、保健所の1週間の定点あたり報告数と比較する値。

感度：流行現象の開始の前4週間のいずれかの週に、流行発生注意報が発生される確率。

特異度：非流行期（流行期とその前の1週間を除く期間）に、流行発生注意報が発生されない確率。

陽性的中率：発生された流行発生注意報の中で、流行現象の開始の前4週間のものの割合。

頻度：流行発生注意報の発生される頻度。

流行の早期把握時点の割合：流行現象の開始の前4週間に発生された流行発生注意報の中で、最も早く発生したものの割合。

[・, ・]：流行発生警報の開始基準値、終息基準値

表V-3-2. 流行発生注意報のための基準値と早期把握精度—小児科・内科定点、その2—

	基準値	感度	特異度	陽性		流行の早期把握時点の割合			
				的中率	頻度	4週前	3週前	2週前	1週前
乳児嘔吐下痢症	1.0	87.9%	83.7%	10.4%	17.7%	50.8%	18.3	16.8	14.2
[5.0, 2.0]	2.0	75.8	94.9	19.9	6.2	31.1	19.4	21.5	28.0
	3.0	57.5	98.4	31.0	2.3	18.8	18.2	23.4	39.6
手足口病	1.0	95.2	88.9	16.6	12.8	43.1	25.6	17.5	13.7
[5.0, 2.0]	2.0	83.4	96.7	30.1	4.6	23.2	21.0	24.4	31.4
	3.0	59.7	98.9	40.9	1.9	13.3	15.7	25.2	45.8
伝染性紅斑	0.7	61.1	95.4	15.6	5.4	32.0	24.9	21.6	21.6
[2.0, 1.0]	1.0	58.1	96.7	18.7	4.0	27.4	25.5	23.1	24.0
	1.5	19.1	99.4	25.4	0.7	21.8	25.0	20.9	32.3
突発性発しん	1.5	78.2	87.9	3.5	12.4	43.2	24.3	14.5	18.0
[4.0, 2.0]	2.0	72.5	93.8	5.5	6.5	35.8	25.9	15.6	22.7
	2.5	38.4	98.1	7.2	2.0	29.5	21.7	19.3	29.5
ヘルパンギーナ	1.0	93.3	89.4	19.1	12.6	38.1	28.1	20.5	13.3
[6.0, 2.0]	2.0	85.0	95.9	29.7	5.7	19.6	21.6	30.2	28.6
	3.0	71.4	98.1	38.2	2.9	10.7	13.4	31.0	44.9
インフルエンザ様疾患	5.0	84.4	93.6	20.3	7.8	10.5	12.0	27.6	49.9
[30.0, 10.0]	10.0	70.2	97.5	31.2	3.5	5.7	8.7	21.7	63.8
	15.0	52.9	98.8	37.7	1.9	3.4	6.3	16.3	74.0
MCL S	0.1	9.8	97.2	0.9	2.8	24.3	13.5	29.7	32.4
[1.0, 0.1]	0.3	9.0	98.9	2.2	1.1	26.5	14.7	26.5	32.3
	0.5	7.1	99.4	3.1	0.1	22.2	11.1	25.9	40.7
咽頭結膜熱	0.1	33.3	96.5	11.1	3.9	28.9	23.1	26.0	22.0
[1.0, 0.1]	0.3	28.7	98.4	17.2	1.9	20.1	24.0	25.8	30.1
	0.5	22.5	99.2	22.2	1.0	15.1	22.5	26.0	36.4

基準値：流行発生注意報の発生のために、保健所の1週間の定点あたり報告数と比較する値。

感度：流行現象の開始の前4週間のいずれかの週に、流行発生注意報が発生される確率。

特異度：非流行期（流行期とその前の4週間を除く期間）に、流行発生注意報が発生されない確率。

陽性的中率：発生された流行発生注意報の中で、流行現象の開始の前4週間のものの割合。

頻度：流行発生注意報の発生される頻度。

流行の早期把握時点の割合：流行現象の開始の前4週間に発生された流行発生注意報の中で、最も早く発生したものの割合。

[・, ・]：流行発生警報の開始基準値，終息基準値

表 V - 3 - 3. 流行発生注意報のための基準値と早期把握精度—眼科定点—

	基準値	感度	特異度	陽性		流行の早期把握時点の割合			
				的中率	頻度	4週前	3週前	2週前	1週前
咽頭結膜熱	0.1	0.8%	99.8%	5.1%	0.3%	16.7%	16.7	50.0	16.7
[1.0, 0.1]	0.3	0.8	99.9	10.5	0.1	16.7	16.7	50.0	16.7
	0.5	0.5	99.9	10.0	0.1	25.0	0.0	50.0	25.0
流行性角結膜炎	2.0	88.2	85.1	6.5	15.7	49.6	28.2	12.0	10.2
[8.0, 4.0]	4.0	64.6	96.8	13.9	3.7	25.5	25.0	20.2	29.3
	6.0	32.0	99.3	22.7	0.9	21.4	23.3	14.6	40.8
急性出血性結膜炎	0.1	1.3	99.7	6.6	0.3	16.7	25.0	25.0	33.3
[1.0, 0.1]	0.3	1.2	99.8	7.7	0.2	18.2	27.3	18.2	36.4
	0.5	1.1	99.8	8.5	0.2	20.0	20.0	20.0	40.0

基準値：流行発生注意報の発生のために、保健所の1週間の定点あたり報告数と比較する値。

感度：流行現象の開始の前4週間のいずれかの週に、流行発生注意報が発生される確率。

特異度：非流行期（流行期とその前の4週間を除く期間）に、流行発生注意報が発生されない確率。

陽性的中率：発生された流行発生注意報の中で、流行現象の開始の前4週間のものの割合。

頻度：流行発生注意報の発生される頻度。

流行の早期把握時点の割合：流行現象の開始の前4週間に発生された流行発生注意報の中で、最も早く発生したものの割合。

[・, ・]：流行発生警報の開始基準値, 終息基準値

表V-3-4. 流行発生注意報のための基準値の選定結果—小児科・内科定点、眼科定点—

	適格基準の目安との比較結果				
	基準値	感度	特異度	陽性的中率	総合判定
小児科・内科定点					
麻疹様疾患	0.5	66.6○	95.6○	19.7△	△
風しん	1.0	80.8◎	95.7○	22.4○	○
水痘	4.0	71.5◎	95.6○	19.1△	△
流行性耳下腺炎	3.0	66.6○	97.9○	24.0○	○
百日せき様疾患	-	-	-	-	×
溶連菌感染症	2.0	68.5○	96.1○	18.0△	△
異型肺炎	-	-	-	-	×
感染性胃腸炎	10.0	62.4○	97.8○	31.4◎	○
乳児嘔吐下痢症	3.0	57.5△	98.4◎	31.0◎	△
手足口病	2.0	83.4◎	96.6○	30.1◎	◎
伝染性紅斑	1.0	58.1△	96.7○	18.7△	△
突発性発しん	-	-	-	-	×
ヘルパンギーナ	3.0	71.4◎	98.1◎	38.2◎	◎
インフルエンザ様疾患	10.0	70.2◎	97.5○	31.2◎	◎
MCL S	-	-	-	-	×
咽頭結膜熱	-	-	-	-	×
眼科定点					
咽頭結膜熱	-	-	-	-	×
流行性角結膜炎	-	-	-	-	×
急性出血性結膜炎	-	-	-	-	×

感度 ◎：70%以上 ○：60～70%未満 △：60%弱

特異度 ◎：98%以上 ○：95～98%未満 △：95%弱

陽性的中率 ◎：30%以上 ○：20～30%未満 △：20%弱

総合判定 ◎：適切（感度・特異度・陽性的中率の判定結果の過半数が◎の場合）

○：ある程度適切（総合判定の中で、◎、△、×以外の場合）

△：可能（感度・特異度・陽性的中率の判定結果に1つ△があるが、他は◎または○の場合）

×：不適切（感度・特異度・陽性的中率の判定結果の1つ以上に、◎○△以外がある場合）

V-4. 広域的な警告発生方法

本章のこれまでの節では、流行発生警報と注意報のいずれの警告、その想定する異常現象のいずれの形（突発的増加、短期的流行、中期的増加）でも、警告発生の単位として保健所を想定した。これは、警告のねらいを専門家に対する迅速な注意喚起と定めたためである。多くの感染症では、流行発生は地域局在的に起こり、時間の経過とともに地域的に流行が拡大していくと考えられる。本警告は、流行現象が広い地域に拡大する前に、より早期の段階で発生し、その後の流行現象の拡大を阻止することにねらいがある。その意味で、警告の単位を保健所を基本とし、より広域の都道府県や国としないことはある程度妥当性があるものとする。

一方、流行の拡大阻止の面からは、広域的な観点から早期の対策を講ずることが重要であり、その意味では広域的な警告発生を考えることが必要である。また、性感染症などのように、中期的増加を問題にする場合には、地域局在的流行というよりも、広域的な状況の考慮が重要と考えられる。ただ、広域的な意味での警告においても、より狭い地域での流行状況（警告状況）が、その後の対策の立案や実施上、不可欠なものと考えられる。

広域的な警告発生を考える上で、それを構成するより狭い地域の警告状況との整合性を考慮しておくことも重要と考える。たとえば、広域的には警告が出ても、それを構成するより狭い地域には全く警告が出ていないことなどは、避けるべきと考えられる。その意味では、広域的警告は、それを構成するより狭い地域の警告状況を基礎とするのが適切と考える。

以上を考慮すると、警告発生単位を保健所としつつ、一方、それを都道府県・国という広域的な観点からも見るという方式を採用すればよいと考える。すなわち、各都道府県では、その構成する各保健所あるいはその周辺の保健所における警告発生状況を監視し、たとえば、ある程度の数の保健所で警告が出れば、その都道府県全体に警告が出たとみなせばよいと考える。国でも、同様に、各都道府県での警告発生した保健所数などを監視し、たとえば、警告発生した保健所がある程度の都道府県に及べば、国全体に警告が出たとみなせばよいと考える。

このような保健所での警告発生状況に基づく広域的な警告発生方法を適用するために、具体的な基準の設定も検討の余地がある。たとえば、管内保健所の10%以上に警告が発生した場合にその都道府県に警告を発生する、ある都道府県に警告が発生された場合に地理的に隣接する都道府県に警告を発生する、5つ以上の都道府県に警告が発生された場合に国全体に警告を発生する、などである。ただ、保健所の警告発生状況から都道府県や国の警告発生を考えると、各保健所の地理的關係や交通状況などを考慮することが必要と考えられる。それゆえ、比較的簡単で、かつ、妥当な基準を設定することはきわめて難しいと考えられる。一方、そのような基準の必要性はあまり大きくないと思われる。とくに、専門家に対する迅速な注意喚起をねらいとするならば、都道府県や国は、全国の保健所の警告発生状況を監視すればよい。監視する警告発生に関する情報としては、たとえば、都道府県であれば、管内の個々の保健所の警告発生状況および全国の都道府県別の警告発生した保健所数な

どが考えられ、また、国であれば、全国の都道府県別の警告発生した保健所数などが考えられる。

上記で述べた広域的な警告発生の観察方法について、インフルエンザ様疾患の 1995 年第 1～5 週を例として説明する。国全体の警告発生状況を見るために、表 V-4-1 に、都道府県、警告発生の有無別の保健所数を示す。第 1 週をみると、北海道、東北、北陸、中国、四国地方では注意報・警報ともにほとんど出ていない。関東地方では注意報がいくつか出ており、警報は少ない。東海、近畿、九州地方では注意報と警報が同数程度出ている。いずれの地域でも、第 1 週から第 4 週に進むに連れて、注意報が増加し、それよりも若干遅れて警報が増加し、それとともに注意報が減少している。都道府県の警告発生状況を見るために、例として、表 V-4-2 に埼玉県の保健所別の警告発生状況を示す。第 2 週をみると、警報は全く出ていないが、注意報はかなりの保健所に出ている。第 3 週には、ほとんどの保健所で警報が出ているが、注意報も少なくない。第 4 週、第 5 週には、警報の出ている保健所が増え、注意報はほとんど出ていない。

表V-4-1. 都道府県、警告発生の有無別の保健所数—インフルエンザ様疾患、1995年第1～5週—

	総数	第1週		第2週		第3週		第4週		第5週	
		注意報	警報	注意報	警報	注意報	警報	注意報	警報	注意報	警報
北海道	29	-	-	-	2	4	2	2	12	7	14
青森	8	-	-	-	-	1	-	1	5	1	5
岩手	10	-	-	-	-	2	-	1	7	1	8
宮城	12	-	-	-	-	-	-	4	4	3	8
秋田	9	-	-	-	-	1	-	2	4	1	6
山形	8	-	-	-	-	2	-	4	4	2	6
福島	8	-	-	2	-	4	1	1	5	2	5
茨城	14	-	1	3	4	4	7	3	11	3	11
栃木	6	-	-	1	-	3	2	1	3	2	3
群馬	12	-	-	2	1	1	7	1	9	1	9
埼玉	23	3	2	7	9	8	15	-	23	-	23
千葉	16	-	-	8	-	6	9	1	12	2	12
東京	49	3	-	14	3	15	18	16	23	12	23
神奈川	38	1	-	9	5	14	19	5	28	4	28
新潟	14	2	-	2	1	4	7	4	10	2	10
富山	10	-	-	2	2	5	5	3	6	2	6
石川	5	-	-	1	-	-	5	-	5	-	5
福井	6	-	-	2	-	-	4	-	5	-	6
山梨	8	-	-	5	-	3	5	2	6	1	6
長野	10	1	-	5	-	3	3	3	5	2	5
岐阜	12	2	2	-	4	1	4	1	4	2	4
静岡	12	-	2	3	4	4	6	2	7	2	7
愛知	35	6	8	8	22	4	27	4	28	1	25
三重	9	3	-	3	5	-	9	-	9	-	9
滋賀	7	-	-	1	3	1	5	1	5	-	5
京都	23	-	1	2	13	4	16	4	17	-	17
大阪	54	2	6	11	22	9	31	5	34	1	34
兵庫	33	4	3	8	14	6	19	6	23	3	22
奈良	6	-	-	3	2	2	3	-	4	-	4
和歌山	9	-	-	3	3	1	8	-	8	-	5
鳥取	3	-	-	1	-	1	2	-	3	-	3
島根	7	-	-	-	1	1	4	1	6	1	6
岡山	10	-	-	1	-	3	3	3	4	1	4
広島	12	-	-	3	3	2	7	2	9	-	9
山口	10	-	-	4	6	-	10	-	10	-	10
徳島	8	-	-	2	2	2	6	-	8	-	8
香川	7	1	-	2	3	-	6	-	6	-	6
愛媛	9	-	-	5	2	1	7	-	8	-	8
高知	10	1	-	4	4	-	9	-	10	-	9
福岡	22	8	4	3	17	-	20	-	20	-	19
佐賀	5	-	-	-	5	-	5	-	5	-	5
長崎	10	-	1	-	8	-	9	-	8	-	8
熊本	12	2	2	3	8	-	12	-	12	-	11
大分	10	3	-	3	6	-	10	-	10	-	10
宮崎	9	-	-	4	4	-	8	-	8	-	8
鹿児島	17	-	1	2	8	1	12	2	15	-	13
沖縄	7	-	-	1	-	-	2	1	3	1	3
全国	663	42	33	143	196	123	369	86	471	60	471

表V-4-2. 保健所別、警告の発生状況—インフルエンザ様疾患、1995年第1～5週、埼玉県—

保健所番号	第1週	第2週	第3週	第4週	第5週
1	—	*	**	**	**
2	—	—	*	—	
3	—	*	**	**	**
4	—	*	*	**	**
5	—	—	*	*	*
6	—	—	*	—	*
7	—	*	**	**	**
8	—	*	**	**	**
9	—	—	**	**	**
10	—	—	**	**	**
11	—	—	*	**	**
12	—	—	—	—	—
13	—	—	*	**	**
14	—	*	**	**	**
15	—	*	**	**	**
16	—	*	**	**	**
注意報の発生数	0	8	6	1	2
警報の発生数	0	0	9	12	12

* : 注意報 ** : 警報

VI. 感染症発生動向調査の新旧対象疾患の比較

本年 4 月 1 日の「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」（以下新法）の施行により、新しい感染症類型である 1 類感染症から 4 類感染症の全てについて、一元的な情報収集、分析、提供、公開体制を構築することとされた。4 類感染症には、全数届出の疾患と（旧）感染症発生動向調査のように定点サーベイランスを行う疾患とがある。ここで議論されていることは 4 類感染症の定点サーベイランス疾患が対象であるが、新法の施行によりサーベイランス定点自体も大幅な見直しが行われた。警告設定に当たっては、なんらかの方法においてベースラインを定める必要があるが、これに違ったサーベイランス定点から集められた過去のデータを使用することができるかははなはだ疑問である。

もし、新旧の定点で変更されたところがその数だけであれば、定点当たり数で比較すればその比較性は保たれると考えられるが、問題は定点となる医療機関は均質なものではないと言う点である。新旧の定点医療機関が過去どのような疾患を主に扱ってきたかというようなデータを収集することは現実的には無理であり、また集め得たとしても今後もその傾向が継続するかどうかも保証されるものではない。故に、直接に新旧システムにおける定点の質の変化を検討することは不可能であるため、本章ではその選定基準の違いと実際の報告数の差違から新旧データを比較してみたい。

VI-1. 小児科定点疾患

小児科定点対象疾患は、旧システムでは、麻疹様疾患、風疹、水痘、流行性耳下腺炎、百日咳様疾患、溶連菌感染症、異型肺炎、感染性胃腸炎、乳児嘔吐下痢症、手足口病、伝染性紅斑、突発性発疹、ヘルパンギーナ、インフルエンザ様疾患、川崎病、咽頭結膜熱であったが、新システムでは、これらのうち、インフルエンザが内科定点を含むインフルエンザ定点に整理され、乳児嘔吐下痢症が感染性胃腸炎に含まれて削除され、異型肺炎と川崎病が削除された。その他麻疹様疾患が麻疹、溶連菌感染症が A 群溶血性連鎖球菌感染症と診断名称が変更された。

1) 定点の選定方法の変化

旧システムでは、小児科・内科定点として整理されており、概ね 2400 の医療機関が定点となっていた。選定基準は小児科及び内科の医療機関（主として小児科）を患者定点とすることとされている。新システムでは、小児科定点という名称に変更になり、文字通り小児科を標榜する医療機関（主として小児科医療を提供しているもの）を定点として指定することとなり、定点数は概ね 2800 に増加した。

2) 疾患別検討

疾患別に報告数の比較をするために、表VI-1-1～VI-1-24に、それぞれ過去7年間の第13～22週における定点当たり報告数の推移と都道府県別、週別の定点当たり報告数の相関係数を示した。また、図VI-1-1～VI-1-12に過去10年間の週別定点当たり報告数の推移のグラフを示した。ここで、1999年第13週の半ばで旧システムと新システムの切り替えが行われているため、第13週のデータは完全なものではない。1999年第12週までが旧システムで収集されたデータ、第14週以降が新システムで収集されたデータである。

突発性発疹は、報告症例の年齢は0歳と1歳で99%を占めており、それ以上の年齢の報告は稀である。季節性はなく、毎週の定点当たり報告数は0.5～0.9例で一定しており、年次による差異もほとんどない。本疾患の原因ウイルスのヒトヘルペスウイルス6型の血清疫学調査からは2歳頃までにほとんどの乳児が抗体陽性となることが判明しており、不顕性感染は20～40%と報告されている。このような疫学的特徴から本疾患は過去感染症発生动向調査のデータ解析の際に基準疾患として利用されてきた。ゴールデンウィークや年末など休日や病院の休業に伴って疾患報告数が変動することはよく知られているが、これを標準化するために本疾患の報告数がほとんど一定と言うことを利用して、各疾患の報告数を突発性発疹の報告数で除した値でトレンドを比較しようとした試み（平成六年感染症サーベイランス事業年報、382-383p）、あるいは本疾患が2歳までにほとんどのこどもが罹患するということから、実際の突発性発疹の発生数を推計し、それと本調査の報告数を使用して定点医療機関での疾患捕捉率を算定して、各疾患の人口10万人当たりの罹患率推定に利用されたりしている（病原微生物検出情報、Vol.9、No.4、2p）。

そこで、突発性発疹をみると、図VI-1-10より、第12週と14週の間にあきらかなギャップが認められ、報告数の著増が認められる。これは表VI-1-19からもゴールデンウィークの第18週を除けば、ほとんどで過去の同じ週の平均+2標準偏差を超えており、相関係数も過去と隔たりが認められる。過去の経験と上記の疫学的特徴からすれば、この時期に突発性発疹が大幅に増加することは考えにくい。これは疾患の捕捉率が上昇したものと考えるしかない。同様に全ての疾患の捕捉率が上昇しているものとするれば、基本的に過去のデータと現在の新法下のデータを比較することは困難ということになる。

疾患の疫学的特徴からもう一つの基準疾患と考えられているのは水痘である。表VI-1-5、6と図VI-1-4をみると、水痘の報告数は過去と大幅な隔たりは認められない。突発性発疹との違いを考えると、罹患年齢の違いと臨床診断の難易度と思われる。すなわち突発性発疹は乳児が多く、小児科専門医に受診することが多いが、水痘は比較的罹患年齢が高いので小児科専門医のみならず内科医等にも受診することが多いのではないかと考えられる。このことが、定点がより小児科専門医の比率が高まってあまり報告数が変わらない理由ではないかと考えられる。

このように考えてみると、感染性胃腸炎、手足口病、風疹、ヘルパンギーナ、麻疹、伝染性紅斑、百日咳、流行性耳下腺炎は過去と連続性が保たれている。この理由としては、感染性胃腸炎、手足口病、ヘルパンギーナなど、毎年季節的な流行があり、報告数が元々多いため、あるいは風疹、麻疹、

百日咳のように、予防接種の普及にて非常に少なくなっている、あるいは感染性胃腸炎、手足口病、ヘルパンギーナ、伝染性紅斑、流行性耳下腺炎、水痘など罹患年齢が比較的高いため、定点の小児科専門医と内科医の比率に大きな影響を受けないのではないかと考えられた。一方、咽頭結膜熱、A 群溶血性連鎖球菌感染症はあきらかなギャップがある。この2疾患の増加は、いずれの疾患も診断にはある程度の小児科臨床経験が必要と考えられるので、小児科専門医が増加したことによる捕捉率の上昇によるものと考えられるが、罹患年齢は比較的高く、またいずれも昨年より増加傾向がみられているため、一概に定点の捕捉率上昇に伴うものであるとの判断を下すことはできない。

更に各疾患の報告数を突発性発疹の報告数で割った値でプロットしてみると、図VI-I-13の如く、A 群溶血性連鎖球菌感染症では過去との連続性が改善する。しかしながら、麻疹では図VI-I-14に示すようにギャップが大きくなる。一方、咽頭結膜熱では、図VI-I-15のように、突発性発疹一例当たりの数でプロットしてみても傾向は変わらず、実際に例年より早期に報告数が上昇している可能性も高い。ここからも、あきらかなギャップがある疾患においても比較性が非常に劣るとは一概に言えない状況があると言える。

3) まとめ

旧システムと新システムの定点当たり報告数を比較したところ、水痘、感染性胃腸炎、手足口病、風疹、ヘルパンギーナ、麻疹、伝染性紅斑、百日咳、流行性耳下腺炎では、過去のデータと大きな分離はなく、概ね連続性が保たれていると考えられる。突発性発疹においては、小児科専門医の定点医療機関に占める割合の増加のために疾患捕捉率が上昇していると考えられた。咽頭結膜熱とA 群溶血性連鎖球菌感染症も定点当たり報告数が増加しているが、発生数自体が増加していることを否定できず、実際咽頭結膜熱では突発性発疹の報告数で除した数でのプロットも同様の傾向をとる。すなわち、突発性発疹で表される疾患捕捉率上昇が、他の疾患の捕捉率に大きく影響していると言うことはできず、突発性発疹を除けばほとんどの疾患で、過去のデータとの比較性が非常に劣るとは考えにくい。咽頭結膜熱とA 群溶血性連鎖球菌感染症では今後の経過観察が必要と思われる。

表VI-1-1 7年間の第13～22週における定点あたり報告数
—麻しん(旧調査:麻しん様疾患)—

年次	週数										週平均
	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
1993	0.43	0.47	0.47	0.52	0.51	0.47	0.65	0.59	0.62	0.56	0.53
1994	0.30	0.34	0.40	0.42	0.38	0.39	0.46	0.41	0.37	0.33	0.38
1995	0.17	0.22	0.19	0.21	0.20	0.20	0.26	0.26	0.26	0.27	0.22
1996	0.34	0.34	0.32	0.34	0.36	0.33	0.44	0.39	0.41	0.37	0.37
1997	0.17	0.20	0.19	0.18	0.20	0.20	0.27	0.24	0.24	0.24	0.21
1998	0.14	0.14	0.14	0.12	0.13	0.12	0.14	0.12	0.11	0.09	0.12
1999	0.03	0.11	0.11	0.12	0.09	0.08	0.12	0.10	0.11	0.06	0.09
93-98年の											
平均	0.26	0.29	0.29	0.30	0.30	0.29	0.37	0.33	0.34	0.31	0.31
標準偏差	0.10	0.11	0.12	0.14	0.13	0.12	0.17	0.15	0.16	0.14	0.13
最大値	0.43	0.47	0.47	0.52	0.51	0.47	0.65	0.59	0.62	0.56	0.53
最小値	0.14	0.14	0.14	0.12	0.13	0.12	0.14	0.12	0.11	0.09	0.12

表VI-1-2 7年間の都道府県別、第13～22週の定点あたり報告数の相関係数
—麻しん—

	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
1993	1.00	0.04	-0.12	0.02	-0.23	0.17	0.35
1994	0.04	1.00	-0.05	-0.05	0.20	-0.11	-0.15
1995	-0.12	-0.05	1.00	-0.18	-0.10	0.23	-0.06
1996	0.02	-0.05	-0.18	1.00	0.02	-0.11	-0.15
1997	-0.23	0.20	-0.10	0.02	1.00	-0.18	-0.19
1998	0.17	-0.11	0.23	-0.11	-0.18	1.00	-0.01
1999	0.35	-0.15	-0.06	-0.15	-0.19	-0.01	1.00

表VI-1-3 7年間の第13～22週における定点あたり報告数
—風しん—

年次	週数										週平均
	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
1993	2.69	3.00	2.74	2.75	3.32	2.47	3.22	3.54	2.98	3.34	3.00
1994	0.65	0.77	0.84	0.62	0.75	0.67	0.69	0.69	0.65	0.62	0.69
1995	0.21	0.21	0.26	0.23	0.23	0.25	0.30	0.33	0.28	0.31	0.26
1996	0.33	0.38	0.36	0.33	0.43	0.32	0.56	0.59	0.58	0.77	0.46
1997	0.77	0.87	0.94	0.82	0.79	0.88	1.00	1.13	0.83	0.99	0.90
1998	0.44	0.45	0.38	0.43	0.38	0.31	0.36	0.36	0.39	0.36	0.38
1999	0.01	0.05	0.05	0.05	0.05	0.03	0.04	0.04	0.05	0.04	0.04
93-98年の											
平均	0.85	0.95	0.92	0.86	0.98	0.82	1.02	1.11	0.95	1.06	0.95
標準偏差	0.85	0.95	0.85	0.87	1.06	0.77	1.01	1.12	0.92	1.04	0.94
最大値	2.69	3.00	2.74	2.75	3.32	2.47	3.22	3.54	2.98	3.34	3.00
最小値	0.21	0.21	0.26	0.23	0.23	0.25	0.30	0.33	0.28	0.31	0.26

表VI-1-4 7年間の都道府県別、第13～22週の定点あたり報告数の相関係数
—風しん—

	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
1993	1.00	-0.02	0.09	0.02	0.02	0.04	-0.15
1994	-0.02	1.00	0.00	-0.04	0.26	-0.11	-0.16
1995	0.09	0.00	1.00	0.09	-0.12	-0.11	-0.09
1996	0.02	-0.04	0.09	1.00	-0.17	-0.17	0.06
1997	0.02	0.26	-0.12	-0.17	1.00	0.07	0.10
1998	0.04	-0.11	-0.11	-0.17	0.07	1.00	0.38
1999	-0.15	-0.16	-0.09	0.06	0.10	0.38	1.00

表VI-1-5 7年間の第13～22週における定点あたり報告数

～水痘～

年次	週数										週平均
	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
1993	1.56	1.53	1.43	1.42	1.44	1.44	1.99	1.68	2.12	2.01	1.66
1994	1.92	1.98	1.81	1.73	1.73	1.72	2.11	1.82	2.10	1.91	1.88
1995	1.80	1.64	1.66	1.46	1.58	1.63	2.24	2.06	2.06	2.38	1.85
1996	1.81	1.85	1.74	1.59	1.70	1.35	2.32	2.17	2.43	2.46	1.94
1997	1.75	1.98	1.63	1.56	1.56	1.55	2.05	2.07	1.83	2.08	1.81
1998	1.55	1.71	1.55	1.65	1.53	1.55	1.58	1.37	1.76	1.34	1.56
1999	0.92	2.01	1.79	1.89	1.85	1.91	2.25	2.12	2.42	1.67	1.88
93-98年の											
平均	1.73	1.78	1.64	1.57	1.59	1.54	2.05	1.86	2.05	2.03	1.78
標準偏差	0.13	0.17	0.12	0.11	0.10	0.12	0.24	0.28	0.22	0.37	0.13
最大値	1.92	1.98	1.81	1.73	1.73	1.72	2.32	2.17	2.43	2.46	1.94
最小値	1.55	1.53	1.43	1.42	1.44	1.35	1.58	1.37	1.76	1.34	1.56

表VI-1-6 7年間の都道府県別、第13～22週の定点あたり報告数の相関係数

～水痘～

	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
1993	1.00	0.79	0.74	0.80	0.71	0.77	0.43
1994	0.79	1.00	0.77	0.81	0.78	0.68	0.54
1995	0.74	0.77	1.00	0.67	0.70	0.77	0.52
1996	0.80	0.81	0.67	1.00	0.71	0.69	0.48
1997	0.71	0.78	0.70	0.71	1.00	0.73	0.58
1998	0.77	0.68	0.77	0.69	0.73	1.00	0.54
1999	0.43	0.54	0.52	0.48	0.58	0.54	1.00

表VI-1-7 7年間の第13～22週における定点あたり報告数

～流行性耳下腺炎～

年次	週数										週平均
	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
1993	0.66	0.66	0.60	0.52	0.64	0.52	0.73	0.74	0.72	0.88	0.67
1994	1.39	1.31	1.36	1.06	1.13	1.17	1.19	1.33	1.14	1.48	1.26
1995	0.54	0.57	0.55	0.47	0.47	0.47	0.57	0.70	0.59	0.70	0.56
1996	0.90	0.90	0.91	0.78	0.74	0.65	0.96	0.93	0.91	1.11	0.88
1997	1.15	1.30	1.08	1.06	0.97	0.97	1.05	1.23	1.22	1.34	1.14
1998	1.45	1.25	1.16	1.05	1.13	1.06	1.19	1.22	1.18	1.41	1.21
1999	0.33	0.70	0.74	0.65	0.69	0.59	0.72	0.75	0.74	0.55	0.65
93-98年の											
平均	1.01	1.00	0.94	0.82	0.85	0.81	0.95	1.03	0.96	1.15	0.95
標準偏差	0.34	0.31	0.29	0.25	0.25	0.27	0.23	0.25	0.24	0.29	0.27
最大値	1.45	1.31	1.36	1.06	1.13	1.17	1.19	1.33	1.22	1.48	1.26
最小値	0.54	0.57	0.55	0.47	0.47	0.47	0.57	0.70	0.59	0.70	0.56

表VI-1-8 7年間の都道府県別、第13～22週の定点あたり報告数の相関係数

～流行性耳下腺炎～

	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
1993	1.00	-0.12	-0.29	0.05	0.59	0.05	-0.25
1994	-0.12	1.00	0.00	-0.30	0.13	0.60	0.10
1995	-0.29	0.00	1.00	0.16	-0.27	0.19	-0.62
1996	0.05	-0.30	0.16	1.00	-0.14	-0.22	0.32
1997	0.59	0.13	-0.27	-0.14	1.00	-0.01	-0.34
1998	0.05	0.60	0.19	-0.22	-0.01	1.00	0.03
1999	-0.25	0.10	0.62	0.32	-0.34	0.03	1.00

表VI-1-9 7年間の第13～22週における定点あたり報告数

—百日せき—

年次	週数										週平均
	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
1993	0.02	0.02	0.03	0.03	0.02	0.02	0.03	0.02	0.03	0.03	0.03
1994	0.03	0.04	0.03	0.04	0.04	0.03	0.05	0.04	0.04	0.04	0.04
1995	0.03	0.03	0.04	0.05	0.03	0.03	0.05	0.05	0.05	0.05	0.04
1996	0.03	0.04	0.04	0.07	0.07	0.04	0.06	0.06	0.05	0.06	0.05
1997	0.03	0.02	0.02	0.03	0.02	0.01	0.02	0.02	0.03	0.03	0.02
1998	0.04	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02
1999	0.01	0.01	0.02	0.02	0.01	0.01	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02
93-98年の											
平均	0.03	0.03	0.03	0.04	0.03	0.02	0.04	0.04	0.04	0.04	0.03
標準偏差	0.01	0.01	0.01	0.02	0.02	0.01	0.02	0.02	0.01	0.02	0.01
最大値	0.04	0.04	0.04	0.07	0.07	0.04	0.06	0.06	0.05	0.06	0.05
最小値	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.01	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02

表VI-1-10 7年間の都道府県別、第13～22週の定点あたり報告数の相関係数

—百日せき—

	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
1993	1.00	0.67	0.28	0.47	0.51	0.20	-0.03
1994	0.67	1.00	0.15	0.40	0.54	0.22	0.02
1995	0.28	0.15	1.00	0.32	0.28	0.08	0.34
1996	0.47	0.40	0.32	1.00	0.72	0.42	0.01
1997	0.51	0.54	0.28	0.72	1.00	0.44	0.05
1998	0.20	0.22	0.08	0.42	0.44	1.00	-0.05
1999	-0.03	0.02	0.34	0.01	0.05	-0.05	1.00

表VI-1-11 7年間の第13～22週における定点あたり報告数

—A群溶血性レンサ球菌咽頭炎—

年次	週数										週平均
	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
1993	0.39	0.33	0.43	0.49	0.52	0.37	0.58	0.63	0.69	0.75	0.52
1994	0.62	0.50	0.62	0.74	0.68	0.53	0.70	0.77	0.87	0.91	0.69
1995	0.41	0.31	0.42	0.48	0.45	0.38	0.48	0.59	0.59	0.65	0.48
1996	0.60	0.48	0.47	0.64	0.69	0.46	0.63	0.85	0.87	0.86	0.66
1997	0.64	0.51	0.49	0.65	0.68	0.58	0.59	0.75	0.78	0.83	0.65
1998	0.53	0.51	0.73	0.83	0.74	0.59	0.79	0.91	0.90	1.00	0.75
1999	0.27	0.59	0.80	0.87	0.74	0.53	0.91	1.10	1.23	0.97	0.80
93-98年の											
平均	0.53	0.44	0.53	0.64	0.62	0.48	0.63	0.75	0.78	0.83	0.62
標準偏差	0.10	0.08	0.11	0.12	0.11	0.09	0.10	0.11	0.11	0.11	0.10
最大値	0.64	0.51	0.73	0.83	0.74	0.59	0.79	0.91	0.90	1.00	0.75
最小値	0.39	0.31	0.42	0.48	0.45	0.37	0.48	0.59	0.59	0.65	0.48

表VI-1-12 7年間の都道府県別、第13～22週の定点あたり報告数の相関係数

—A群溶血性レンサ球菌咽頭炎—

	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
1993	1.00	0.85	0.78	0.71	0.51	0.54	0.35
1994	0.85	1.00	0.81	0.76	0.69	0.69	0.46
1995	0.78	0.81	1.00	0.81	0.64	0.66	0.49
1996	0.71	0.76	0.81	1.00	0.63	0.61	0.52
1997	0.51	0.69	0.64	0.63	1.00	0.76	0.46
1998	0.54	0.69	0.66	0.61	0.76	1.00	0.59
1999	0.35	0.46	0.49	0.52	0.46	0.59	1.00

表VI-1-13 7年間の第13～22週における定点あたり報告数

— 感染性胃腸炎 —

年次	週数										週平均
	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
1993	3.45	3.01	3.57	3.90	3.42	2.30	3.12	3.20	3.02	2.91	3.19
1994	3.30	2.78	2.70	2.71	2.55	1.90	2.30	2.19	2.30	2.18	2.49
1995	3.24	2.72	2.87	3.23	2.81	2.10	2.73	2.81	2.85	2.79	2.82
1996	4.49	3.56	3.36	4.01	4.06	2.57	3.21	3.56	3.70	3.11	3.56
1997	3.73	3.38	2.69	2.91	2.89	2.49	2.26	2.39	2.19	2.33	2.73
1998	3.30	3.41	3.19	2.91	2.39	2.03	2.48	2.46	2.36	2.43	2.70
1999	1.81	3.97	4.52	4.52	3.84	2.76	4.20	4.55	5.05	3.55	3.88
93-98年の											
平均	3.59	3.14	3.06	3.28	3.02	2.23	2.68	2.77	2.74	2.62	2.91
標準偏差	0.44	0.32	0.33	0.50	0.57	0.24	0.37	0.48	0.52	0.33	0.36
最大値	4.49	3.56	3.57	4.01	4.06	2.57	3.21	3.56	3.70	3.11	3.56
最小値	3.24	2.72	2.69	2.71	2.39	1.90	2.26	2.19	2.19	2.18	2.49

表VI-1-14 7年間の都道府県別、第13～22週の定点あたり報告数の相関係数

— 感染性胃腸炎 —

	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
1993	1.00	0.85	0.78	0.71	0.51	0.54	0.35
1994	0.85	1.00	0.81	0.76	0.69	0.69	0.46
1995	0.78	0.81	1.00	0.81	0.64	0.66	0.49
1996	0.71	0.76	0.81	1.00	0.63	0.61	0.52
1997	0.51	0.69	0.64	0.63	1.00	0.76	0.46
1998	0.54	0.69	0.66	0.61	0.76	1.00	0.59
1999	0.35	0.46	0.49	0.52	0.46	0.59	1.00

表VI-1-15 7年間の第13～22週における定点あたり報告数

— 手足口病 —

年次	週数										週平均
	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
1993	0.06	0.05	0.06	0.08	0.11	0.10	0.13	0.26	0.38	0.49	0.17
1994	0.07	0.07	0.09	0.13	0.14	0.11	0.15	0.22	0.34	0.38	0.17
1995	0.14	0.16	0.17	0.26	0.33	0.38	0.61	1.08	1.63	2.12	0.69
1996	0.04	0.03	0.05	0.04	0.05	0.04	0.06	0.10	0.12	0.17	0.07
1997	0.11	0.11	0.14	0.16	0.14	0.18	0.23	0.33	0.41	0.57	0.24
1998	0.06	0.08	0.12	0.19	0.21	0.26	0.46	0.80	1.06	1.39	0.46
1999	0.05	0.09	0.13	0.20	0.23	0.17	0.22	0.32	0.39	0.50	0.23
93-98年の											
平均	0.08	0.08	0.11	0.14	0.16	0.18	0.27	0.46	0.66	0.85	0.30
標準偏差	0.03	0.04	0.04	0.07	0.09	0.11	0.20	0.35	0.52	0.68	0.21
最大値	0.14	0.16	0.17	0.26	0.33	0.38	0.61	1.08	1.63	2.12	0.69
最小値	0.04	0.03	0.05	0.04	0.05	0.04	0.06	0.10	0.12	0.17	0.07

表VI-1-16 7年間の都道府県別、第13～22週の定点あたり報告数の相関係数

— 手足口病 —

	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
1993	1.00	-0.02	-0.10	0.02	-0.01	0.13	0.07
1994	-0.02	1.00	0.28	0.08	0.13	0.20	0.23
1995	-0.10	0.28	1.00	-0.03	0.06	0.13	0.26
1996	0.02	0.08	-0.03	1.00	-0.15	-0.15	0.31
1997	-0.01	0.13	0.06	-0.15	1.00	-0.20	0.26
1998	0.13	0.20	0.13	-0.15	-0.20	1.00	-0.23
1999	0.07	0.23	0.26	0.31	0.26	-0.23	1.00

表VI-1-17 7年間の第13～22週における定点あたり報告数

—伝染性紅斑—

年次	週数										週平均
	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
1993	0.13	0.15	0.19	0.21	0.21	0.14	0.16	0.17	0.17	0.16	0.17
1994	0.15	0.14	0.17	0.20	0.17	0.13	0.14	0.16	0.17	0.15	0.16
1995	0.08	0.08	0.08	0.13	0.11	0.09	0.13	0.15	0.18	0.16	0.12
1996	0.31	0.31	0.36	0.43	0.52	0.29	0.35	0.47	0.49	0.64	0.42
1997	0.50	0.55	0.60	0.74	0.65	0.61	0.55	0.61	0.55	0.75	0.61
1998	0.25	0.36	0.41	0.51	0.41	0.31	0.30	0.42	0.36	0.32	0.37
1999	0.08	0.20	0.25	0.25	0.20	0.15	0.20	0.23	0.26	0.20	0.20
93-98年の											
平均	0.24	0.26	0.30	0.37	0.34	0.26	0.27	0.33	0.32	0.36	0.31
標準偏差	0.14	0.16	0.17	0.21	0.20	0.18	0.15	0.18	0.16	0.24	0.18
最大値	0.50	0.55	0.60	0.74	0.65	0.61	0.55	0.61	0.55	0.75	0.61
最小値	0.08	0.08	0.08	0.13	0.11	0.09	0.13	0.15	0.17	0.15	0.12

表VI-1-18 7年間の都道府県別、第13～22週の定点あたり報告数の相関係数

—伝染性紅斑—

	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
1993	1.00	-0.03	-0.03	0.12	-0.24	0.30	0.10
1994	-0.03	1.00	0.27	0.24	0.01	0.09	0.17
1995	-0.03	0.27	1.00	0.41	-0.05	0.04	0.26
1996	0.12	0.24	0.41	1.00	-0.14	0.32	0.32
1997	-0.24	0.01	-0.05	-0.14	1.00	-0.26	-0.32
1998	0.30	0.09	0.04	0.32	-0.26	1.00	-0.07
1999	0.10	0.17	0.26	0.32	-0.32	-0.07	1.00

表VI-1-19 7年間の第13～22週における定点あたり報告数

—突発性発しん—

年次	週数										週平均
	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
1993	0.66	0.73	0.70	0.70	0.60	0.47	0.72	0.76	0.78	0.79	0.69
1994	0.64	0.68	0.70	0.66	0.61	0.47	0.66	0.75	0.72	0.75	0.66
1995	0.64	0.69	0.71	0.70	0.62	0.51	0.69	0.72	0.74	0.73	0.67
1996	0.65	0.67	0.68	0.67	0.62	0.47	0.62	0.69	0.68	0.71	0.65
1997	0.66	0.69	0.71	0.67	0.61	0.52	0.62	0.75	0.73	0.68	0.66
1998	0.66	0.75	0.75	0.73	0.68	0.59	0.71	0.78	0.70	0.72	0.71
1999	0.32	0.79	0.89	0.85	0.74	0.53	0.88	0.89	0.91	0.70	0.75
93-98年の											
平均	0.65	0.70	0.71	0.69	0.62	0.51	0.67	0.74	0.73	0.73	0.67
標準偏差	0.01	0.03	0.02	0.03	0.03	0.05	0.04	0.03	0.03	0.03	0.02
最大値	0.66	0.75	0.75	0.73	0.68	0.59	0.72	0.78	0.78	0.79	0.71
最小値	0.64	0.67	0.68	0.66	0.60	0.47	0.62	0.69	0.68	0.68	0.65

表VI-1-20 7年間の都道府県別、第13～22週の定点あたり報告数の相関係数

—突発性発しん—

	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
1993	1.00	0.93	0.90	0.82	0.69	0.58	0.43
1994	0.93	1.00	0.95	0.90	0.77	0.70	0.53
1995	0.90	0.95	1.00	0.89	0.78	0.70	0.54
1996	0.82	0.90	0.89	1.00	0.82	0.76	0.55
1997	0.69	0.77	0.78	0.82	1.00	0.94	0.59
1998	0.58	0.70	0.70	0.76	0.94	1.00	0.62
1999	0.43	0.53	0.54	0.55	0.59	0.62	1.00

表VI-1-21 7年間の第13～22週における定点あたり報告数
—ヘルパンギーナ—

年次	週数										週平均
	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
1993	0.04	0.04	0.05	0.10	0.10	0.08	0.13	0.20	0.27	0.33	0.13
1994	0.04	0.06	0.06	0.08	0.09	0.08	0.11	0.16	0.24	0.35	0.13
1995	0.05	0.07	0.08	0.09	0.08	0.10	0.18	0.30	0.48	0.65	0.21
1996	0.05	0.05	0.05	0.06	0.09	0.07	0.11	0.23	0.36	0.64	0.17
1997	0.03	0.06	0.07	0.07	0.09	0.10	0.16	0.34	0.52	0.71	0.22
1998	0.04	0.05	0.08	0.12	0.17	0.20	0.37	0.64	0.82	1.11	0.36
1999	0.02	0.09	0.13	0.16	0.22	0.19	0.33	0.57	0.70	0.73	0.31
93-98年の											
平均	0.04	0.05	0.06	0.09	0.11	0.10	0.18	0.31	0.45	0.63	0.20
標準偏差	0.01	0.01	0.01	0.02	0.03	0.04	0.09	0.16	0.20	0.26	0.08
最大値	0.05	0.07	0.08	0.12	0.17	0.20	0.37	0.64	0.82	1.11	0.36
最小値	0.03	0.04	0.05	0.06	0.08	0.07	0.11	0.16	0.24	0.33	0.13

表VI-1-22 7年間の都道府県別、第13～22週の定点あたり報告数の相関係数
—ヘルパンギーナ—

	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
1993	1.0	0.8	0.6	0.4	0.1	0.1	0.0
1994	0.8	1.0	0.6	0.5	0.2	0.2	0.1
1995	0.6	0.6	1.0	0.6	0.4	0.4	0.2
1996	0.4	0.5	0.6	1.0	0.5	0.7	0.3
1997	0.1	0.2	0.4	0.5	1.0	0.5	0.3
1998	0.1	0.2	0.4	0.7	0.5	1.0	0.5
1999	0.0	0.1	0.2	0.3	0.3	0.5	1.0

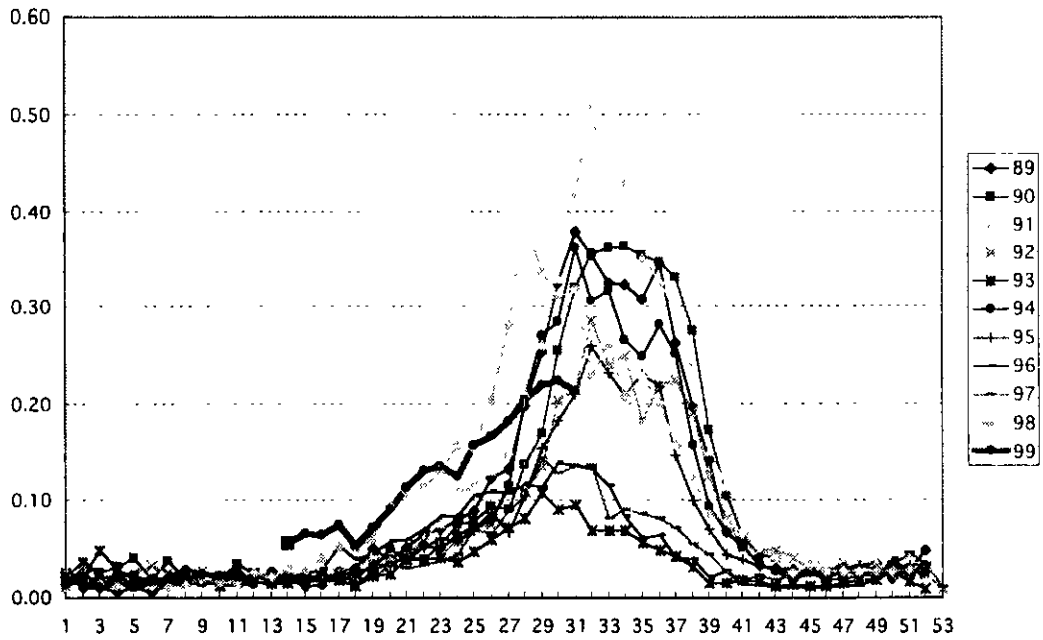
表VI-1-23 7年間の第13～22週における定点あたり報告数
—咽頭結膜熱—

年次	週数										週平均
	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
1993	0.01	0.01	0.02	0.02	0.02	0.01	0.02	0.02	0.04	0.04	0.02
1994	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.03	0.03	0.05	0.04	0.05	0.03
1995	0.01	0.02	0.02	0.03	0.02	0.02	0.04	0.03	0.04	0.05	0.03
1996	0.01	0.02	0.03	0.03	0.05	0.04	0.05	0.06	0.06	0.07	0.04
1997	0.03	0.02	0.01	0.02	0.03	0.02	0.02	0.04	0.03	0.03	0.03
1998	0.02	0.03	0.03	0.04	0.05	0.05	0.06	0.10	0.11	0.12	0.06
1999	0.02	0.06	0.07	0.06	0.07	0.05	0.07	0.09	0.12	0.10	0.07
93-98年の											
平均	0.02	0.02	0.02	0.03	0.03	0.03	0.04	0.05	0.05	0.06	0.04
標準偏差	0.00	0.01	0.01	0.01	0.02	0.01	0.01	0.02	0.03	0.03	0.01
最大値	0.03	0.03	0.03	0.04	0.05	0.05	0.06	0.10	0.11	0.12	0.06
最小値	0.01	0.01	0.01	0.02	0.02	0.01	0.02	0.02	0.03	0.03	0.02

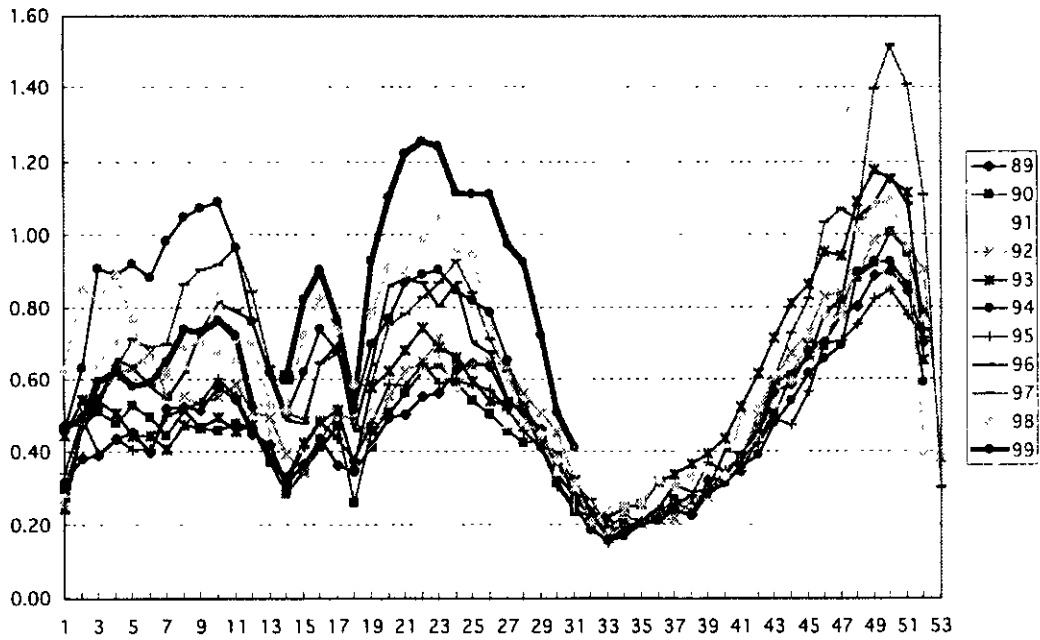
表VI-1-24 7年間の都道府県別、第13～22週の定点あたり報告数の相関係数
—咽頭結膜熱—

	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
1993	1.00	0.82	0.63	0.06	0.22	0.17	0.08
1994	0.82	1.00	0.64	0.08	0.19	0.20	0.20
1995	0.63	0.64	1.00	0.65	0.40	0.16	0.27
1996	0.06	0.08	0.65	1.00	0.37	0.19	0.34
1997	0.22	0.19	0.40	0.37	1.00	0.35	0.29
1998	0.17	0.20	0.16	0.19	0.35	1.00	0.16
1999	0.08	0.20	0.27	0.34	0.29	0.16	1.00

図VI-1-1 週別定点あたり報告数、咽頭結膜熱



図VI-1-2 週別定点あたり報告数、A群溶血性連鎖球菌感染症



図VI-1-3 週別定点あたり報告数、感染性胃腸炎

